日韓における６～７世紀の瓦の関連性についての検討
－平瓦を中心として－

李　仁　淑

Ⅰ．序　言
Ⅱ．韓半島の６～７世紀における平瓦研究史
Ⅲ．日本遺跡出土の６～７世紀における瓦
Ⅳ．日韓瓦の関連性
Ⅴ．結　語

要　旨　百済の瓦博士によって成立した日本の飛鳥時代における初期瓦の技術は、九州地域や関東地域に影響を及ぼし、この時期から、瓦製作技術は日本各地に展開し、ある程度変容していった。そこには明らかに韓半島の造瓦技術が反映されていたであろう。本稿は瓦博士の渡来時期である588年を基準とし、日本で造瓦技術が完全に土着化する前段階である６～７世紀の近畿地域と九州地域の瓦窯跡出土瓦に反映される高句麗、百済、新羅の平瓦製作技法の把握を試みた。その結果、韓半島と日本の平瓦の属性が完全に一致する遺跡はみられなかった。ただ、近畿の平野山瓦窯、栗栖野瓦窯では、百済や高句麗と色調、素地、瓦桶、分割界線の種類など、４つ以上の属性が共通しており、それぞれ百済、高句麗の平瓦製作技術との関連性がうかがえる。また、九州の神ノ前２号窯跡をはじめとした７世紀前半の遺跡から出土する瓦は、平行叩き、格子叩きが多くみられ、粘土紐作りと粘土板作りの両者、瓦桶を用いて製作するものと瓦桶を用いずに製作するものの両者がそれぞれ確認されており、同時期の新羅平瓦の様相と最も類似する。一方で、幡枝元稲荷瓦窯と隼上り瓦窯出土平瓦は高句麗や百済、新羅と同一の属性がすべて１、２点に限られるため、現状ではいずれの国家とも関連付けることは難しい。本稿では、古代日韓における瓦の関連性について平瓦を中心に検討を試みたが、多くの限界と問題が浮き彫りになった。韓半島と日本の初期瓦に対する筆者の理解不足もあり、本文では韓国国内ですでに断片的に紹介されてきた日本初期の軒丸瓦と平瓦を一括遺物として紹介することに重点を置いた。現状では、平瓦のみから韓半島と日本との造瓦技術の影響関係を検討するには多くの限界がある。これを解決するためは、高句麗、百済、新羅の瓦を遺跡別、地域別に綿密に検討する必要がある。また、瓦製作技術の影響関係を把握するために有効な属性がどのようなものであるかに対する、真摯な検討が要求される。

キーワード　韓半島　日本　軒瓦　平瓦　関連性

国立文化財研究所

Ⅰ．序　言

『日本書紀』には、百済から派遣された「瓦博士」などが飛鳥寺を創建したという記録がある。この記録にみられる両国間の瓦の影響関係に対する研究は、百済と日本の初期軒丸瓦の文様と製作技法などの比較を通してすでに立証されている。ところで、飛鳥寺軒丸瓦の文様のなかには、単純に百済の影響を受けたもののみが出土したのではなく、新羅、高句麗の影響を受けたものもある。高句麗の文様モチーフを有する軒丸瓦の場合には、高句麗系なのか、新羅系なのか、あるいは高句麗の影響を受けた百済系であるのか、その判断が困難なものもある。

韓国における初期瓦についての研究は瓦当文様を中心として行われてきたが、最近では平瓦の製作技法に対する研究へと転換している。瓦当文様は、高句麗、百済、新羅の文様がそれぞれ定義されているが、新羅の場合、高句麗や百済の影響を受けたもの、新羅で独自に発生したものなど、多少複雑である。平瓦の製作技法に関しても各国の技法が定義されているが、高句麗、百済、新羅のいくつかの遺跡で多様な様相が確認されており、三国における瓦の特徴をそれぞれ明確に定義することは困難な状況にある。

ところで、日本の瓦生産体系は百済からのシステム導入によって形成された[1]と考えられている。そうであれば、明らかに日本の初期瓦は瓦当のみならず、平瓦においても百済的な要素を確認することができるであろう。また、前述したように、日本に高句麗系や新羅系の瓦当があるとすれば、そのような平瓦も存在する可能性があるであろう。にもかかわらず、日本では瓦当に比べて出土量が多い平瓦に対する報告や議論は不足している。

よって、ここでは、日本で瓦製作技術が導入される６世紀中葉から、韓半島で三国が統一される７世紀中葉までの軒瓦と平瓦を主な検討対象とする。ただし、新羅瓦の開始年代に対する議論と、三国統一後にも存在した三国の瓦製作技術の期間を考慮し、対象時期を６～７世紀とした。地域としては、韓半島の影響を受けた初期瓦が現れる近畿地域と九州地域に限定した。日韓間の造瓦技術の影響関係を検討するには、多様性が存在する消費地より、多様性が少なく使用期間が短い生産地の資料が適切であると判断し、主に日本の瓦窯から出土した瓦を対象とした。

本稿では、まず韓国における平瓦研究の成果を整理して、三国の平瓦の特徴を確認する。その後、日本の各遺跡から出土した軒瓦と平瓦の特徴を詳しくみていくこととする。このような過程を通して、三国と日本の平瓦の属性を比較し、日本の初期瓦出土遺跡が、三国のうちどの国と関係があるのかを検討することとする。最後に、以上の内容を簡単に要約し、今後の課題について言及する。

Ⅱ．韓半島の６～７世紀における平瓦研究史

１．高句麗の平瓦

韓半島南部の高句麗瓦は、瓠蘆古墨、堂捕城、阿未城など主に臨津江流域を中心とし、紅蓮峰などの漢江流域からも出土している。中国や北朝鮮から出土した瓦は、最近図録や報告書などに紹介されているが、資料観察の限界上、高句麗瓦研究は韓半島南部地域出土品に偏っている。シムグァンジュや白種伍、崔孟植の研究が代表的である[2]。

６世紀以後の高句麗瓦をみると、平壌城期には赤色系統が大部分であり、黄褐色と灰青色もある。平瓦は隅丸のものが一般的で、丸瓦は行基式である。凸面文様は丸瓦は無文、平瓦は縄文が多く、これ以外に格子文、鋸歯文などがある。凸面の叩き調整は短板、または中板叩き板を利用した横方向の叩き方法を採用した。丸瓦の模骨は主に円筒形で、平瓦の桶は模骨桶である。模骨の幅は1.5～2.8cmであるが、1.7～2.2cm幅の模骨の使用頻度が最も高い。凹面は模骨による凹凸が著しく、模骨の連結痕跡がほとんどみられないのが特徴的である。粘土素材は主に粘土紐を用いる。側面を二次調整するため、分割界線の痕跡はほとんど確認できないが、分割界線と推定できる紐の痕跡を残すものが少量確認される。凹面には布目痕跡が観察されるが、堂捕城、無等里１堡塁、阿未城など、臨津江一帯の高句麗遺跡から出土する平瓦の凹面には、布目痕跡の上に再度横方向に縄目叩きを施したものもある。

一方、『朝鮮瓦塼図譜Ⅱ　高句麗』[3]に紹介された平壌城期の平瓦は、模骨桶に長板叩き板で叩き調整しているなど、上述の製作技法とは違いがみられる。したがって、今後北朝鮮や中国の資料紹介が充実されれば、高句麗瓦の製作技法はより多様となる可能性がある。

２．百済の平瓦

熊津・泗沘期に該当する時期である。熊津期の遺跡はほとんど確認されていない。泗沘期の遺跡から出土した瓦については、崔孟植の研究が代表的である[4]。

凸面文様は線文（平行叩き）が代表的で、格子文と縄文もある。叩き調整は短板叩き板を利用した弧状、または横方向の叩きである。丸瓦の模骨は円筒形、平瓦の桶は模骨桶と円筒桶の２種類がある。模骨の幅は3.5～５cmのものが最も多いが、幅広のものは６～７cm、幅狭のものは2.5cm程度である。模骨の連結方法については、模骨に穿った穴の配置やその穴を利用して編む方法によって多様である。丸瓦は玉縁式と行基式の両方がある。粘土素材は粘土紐、粘土板の２種類である。側面には紐や棒などを利用した分割界線、釘などを利用した分割界点などが確認される。半截時に瓦刃を当てる方向は、丸瓦においては両側面いずれも凹面側からのもの、両側面いずれも凸面側からのもの、そして一方が凸面側でもう一方は凹面側からのものの大きく３種類が観察される。

瓦内面には主に布目痕跡が残っているが、公州艇止山や扶余扶蘇山城、大田月坪洞遺跡、順天剣丹山城、河東故蘇城、光陽馬老山城などでは、布のかわりに縄や葦を編んで作った「簾」を使用している。

3．新　羅

最初の瓦生産は553年、皇龍寺創建時点と考えられており、一般的に新羅瓦の製作は百済製作技術の導入によるものとみている。金基民や趙成允、崔孟植の研究が代表的である[5]。この時期の瓦としては、土器窯および竪穴遺構内から瓦と土器が共伴して出土する慶州勿川里遺跡出土資料や皇龍寺址出土の初期瓦などがある。

文様は、格子文と線文（平行叩き）が主に確認される。叩き調整は、短板叩き板を利用した弧状叩きである。桶は円筒桶、模骨桶の両者が確認され、桶を用いずに製作した平瓦もある。円筒桶の使用時期は瓦が最初に生産される６世紀中葉頃で、模骨桶とともに使用されたとみている。模骨桶で製作される平瓦では、一部に模骨連結痕が確認されることもある。粘土素材は、粘土板と粘土紐の２種類である。丸瓦は行基式と玉縁式の両者が確認される。丸瓦半截時に瓦刃を当てる方向は、両側面ともに凸面側のものが最も多く、一方が凹面側でもう一方は凸面側のものもある。側面は破断面を二次調整したものもあるが、大部分は未調整である。

一方、加耶圏域に該当する地域でも、６世紀中頃以降に新羅領域に編入される金海府院洞遺跡や高霊池山洞伝王宮址からも、無瓦桶の平瓦が出土ししている。いずれも、平瓦以外の共伴遺物が確認されず、編年やどの国の製作技術によるものかについては議論の余地がある。

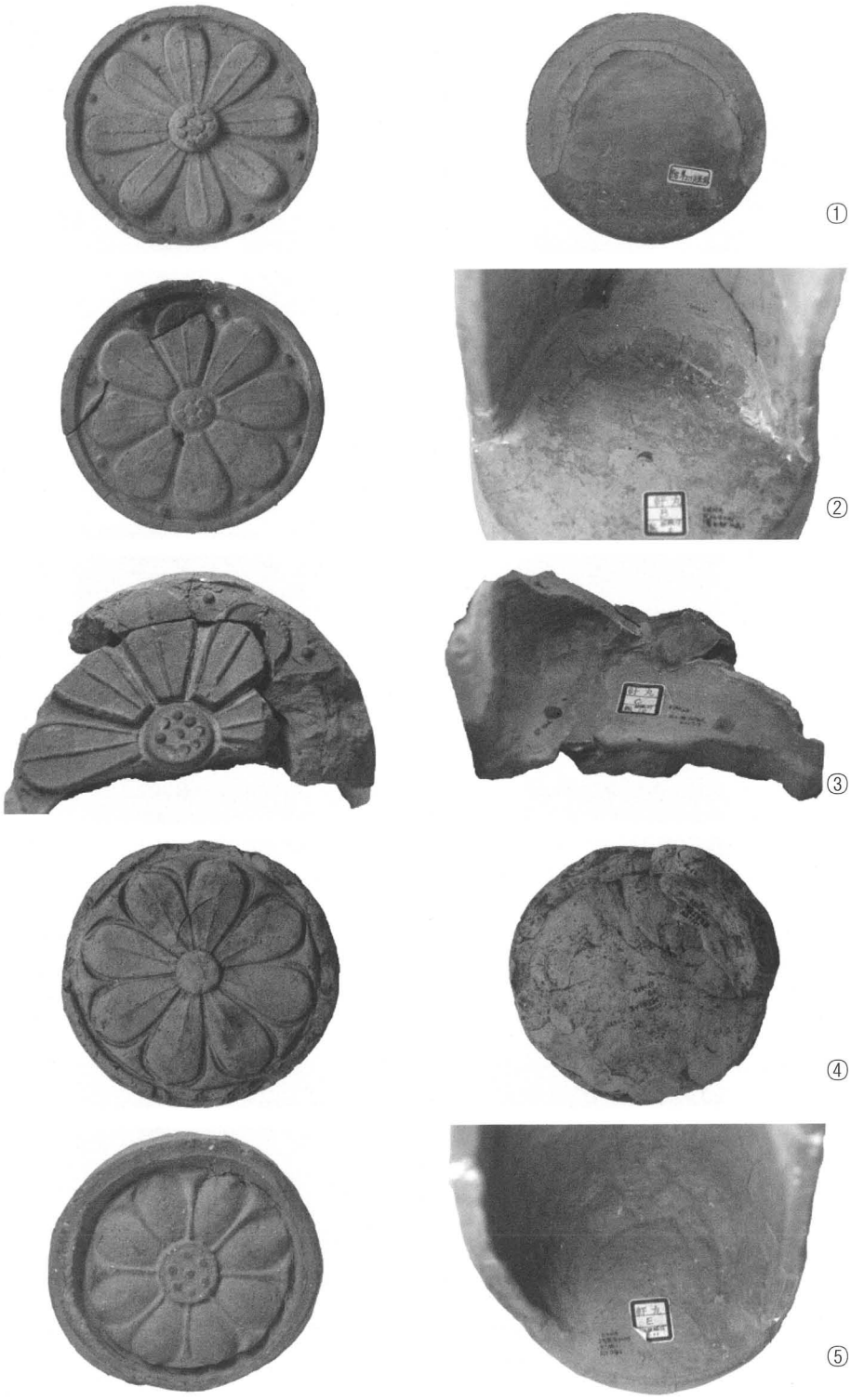
Ⅲ．日本遺跡出土の６～７世紀における瓦

１．近畿地域

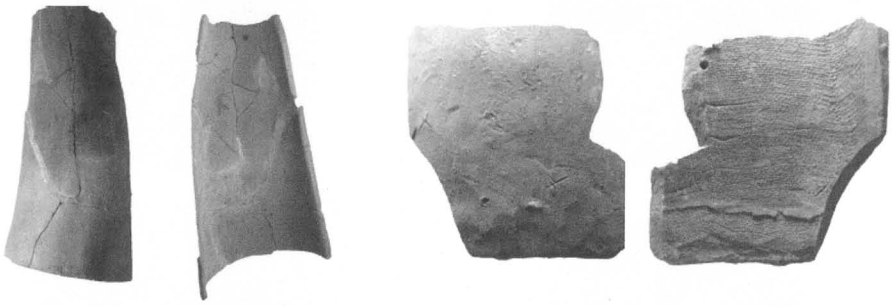
１）隼上り瓦窯[6]（第１・２図）

瓦は、軒平瓦、丸瓦、平瓦などが出土した。軒丸瓦は、すべて単弁八葉蓮華文である。蓮弁間に珠文を配置したり、間弁が楔形である高句麗様式の蓮華文軒丸瓦４種類（第１図①～④）と、弁端が隆起する百済様式の蓮華文軒丸瓦１種類（第１図⑤）が確認された。このうち、高句麗系の１種類（第１図④）を除外した残りの４種類は、創建に関した文献記録が残る豊浦寺出土軒丸瓦と同笵であることが確認されている。高句麗系軒丸瓦の裏面には、不定方向のナデ調整痕が観察される。

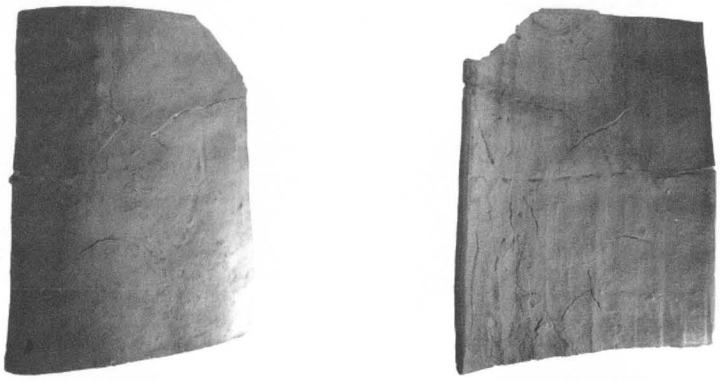
平瓦は硬質で灰青色を呈するものが多いが、赤褐色を呈するものもあり、これは硬・軟質の両者がある。凸面全面にナデ調整が施され、叩き痕がほぼ消されているが、格子文が少量確認される。叩き板の長さは短板である。粘土素材は大部分が粘土板で、凹面に糸切



第１図　隼上り瓦窯出土軒丸瓦



①　②



③

④

第２図　隼上り瓦窯出土丸・平瓦

り痕が確認できる。ただし、一部の丸瓦には粘土紐によって製作されたものもある。

丸瓦はすべて行基式である。粘土円筒半截時に瓦刀を当てる方向は、両側面ともに凸面側である。破断面や側面の凹面側などを3、4回程丁寧にケズリ調整を施している。平瓦の平面形態は上狭下広の台形状である。模骨桶を用いて製作しており、模骨幅は3.2cm程度である。模骨連結痕は認められない。

この窯跡から出土した瓦は、共伴した須恵器の年代観や豊浦寺創建に関する文献に基づいて、605～635年前後の７世紀前半として編年されている。

2）幡枝元稲荷瓦窯[7]（第３・４図）

瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦などが出土した。軒丸瓦は弁端が反転する百済系の素弁十弁蓮華文軒丸瓦が２種類（第３図②～③）と、蓮弁内に稜を有し、弁端が鋭く突出した高句麗系の単弁八弁蓮華文軒丸瓦が１種類（第３図①）ある。前者の裏面には指オサエ痕と無秩序なナデが認められ、後者の裏面には丸瓦の接合部をヘラ状工具で調整した痕跡が残っている。

色調と焼成は灰青色で硬質のもの、赤褐色で硬質あるいは軟質などがあり、多様である。平瓦の粘土素材はいずれも粘土板である。丸瓦は無文の行基式。半截時に瓦刀を当てる方向は両側面ともに凹面内側からで、側面は破断面をそのまま残したものが多い。

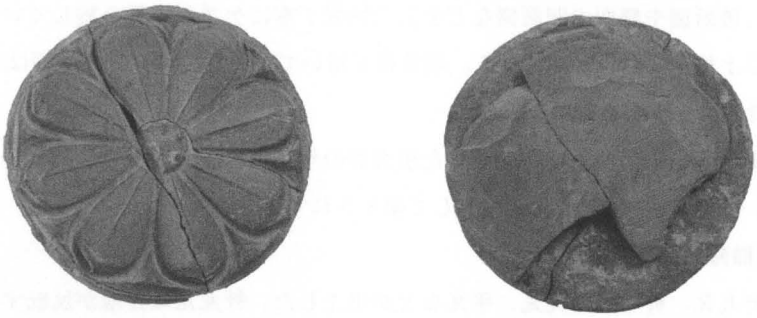
平瓦の平面形態は台形状である。模骨桶を使用しており、模骨板の形態は細長の台形で、上辺が4.3cm、下辺が4.9cmである。模骨の連結痕は確認されない。叩き板の長さは短板で、文様は格子文が３種類あり最も多く、線文（平行叩き）、無文は少ない。側面は丸瓦と同様に、両側面ともに凹面側から瓦刀を当てて分割した後に、破断面や側面の凹凸両面側をケズリ調整している。ただし、破断面をそのまま残す資料も少数確認される。分割界線が残るものもあるが、その種類は棒と推定される。端部については、ナデ調整を施すもの、ヘラ状工具で調整するもの、１回ヘラケズリを施すもの、数回ヘラケズリを施すものなど、多様である。また、端部付近凹凸面について、同心円文当て具と無文叩き板を利用して補足の叩き締め[8]を行ったものがいくつか観察される。

この窯址は瓦陶兼業窯であり、瓦の年代は７世紀前半頃に比定されている。

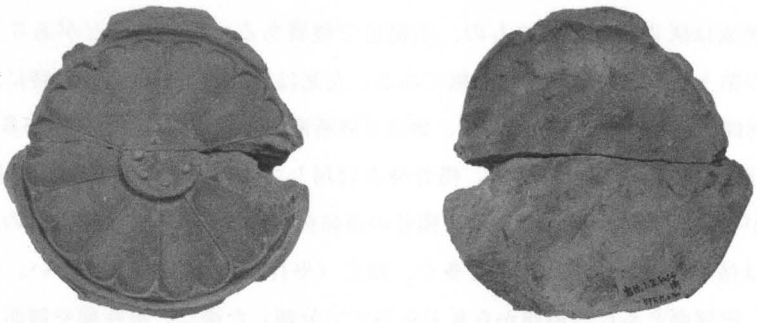
3）平野山瓦窯[9]（第５図）

ここでは、実見した京都府八幡市教育委員会所蔵資料に限定して記述する。瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鴟尾などが出土した。軒丸瓦は素弁八弁蓮華文が２種類出土した。弁端が丸味を帯びながら隆起するもの（法隆寺若草伽藍４A、四天王寺と同笵）と、弁端が鋭く突出しながら隆起するものである（奥山廃寺ⅡDと同笵）。瓦当裏面は、回転ナデ調整を施す。軒平瓦は無顎の三重弧文である。

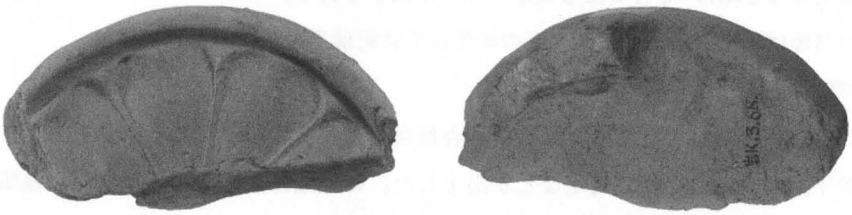
灰青色、または灰白色を呈し硬質のものが多く、赤褐色で硬質のものも少数ある。平瓦



①

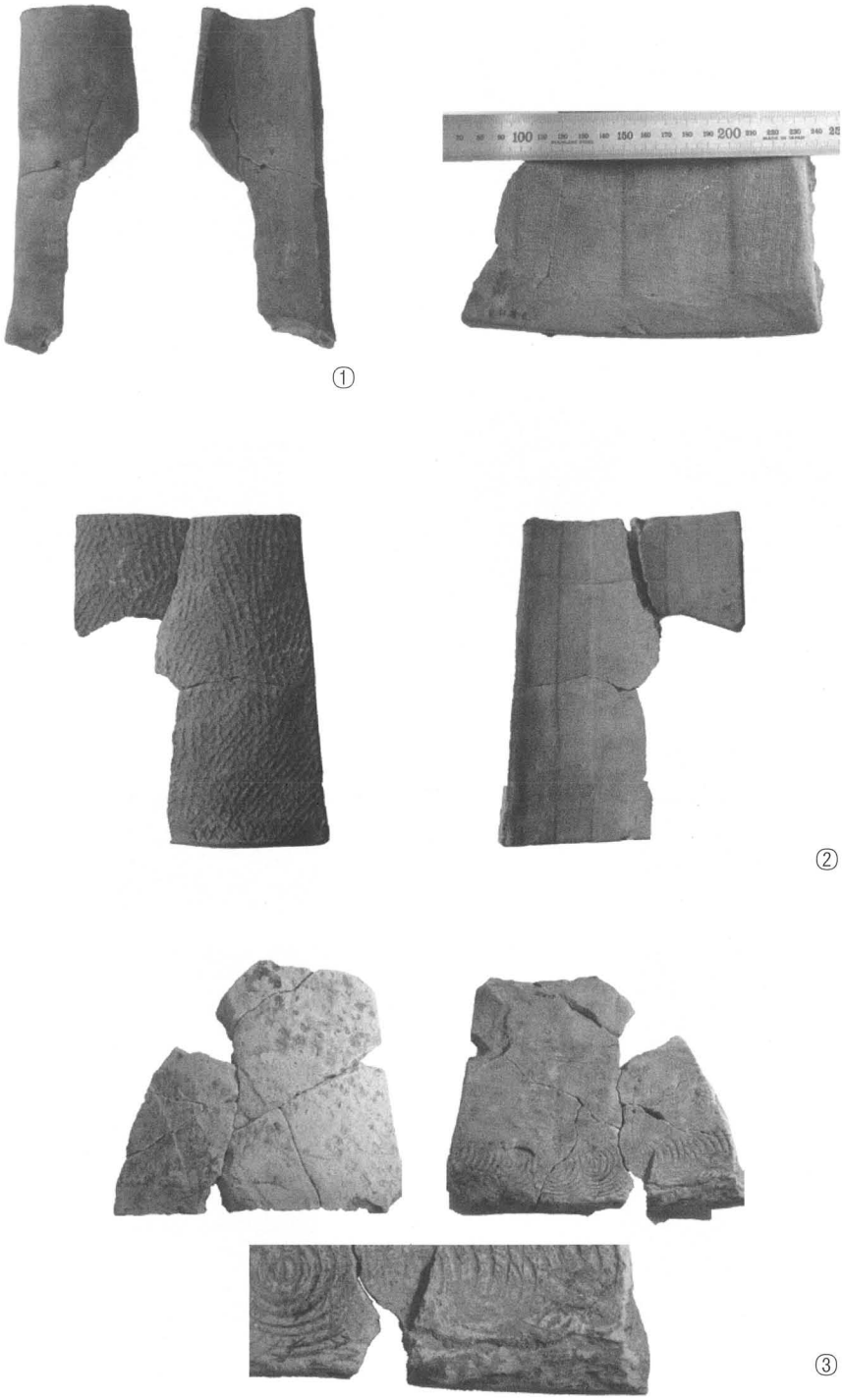


②

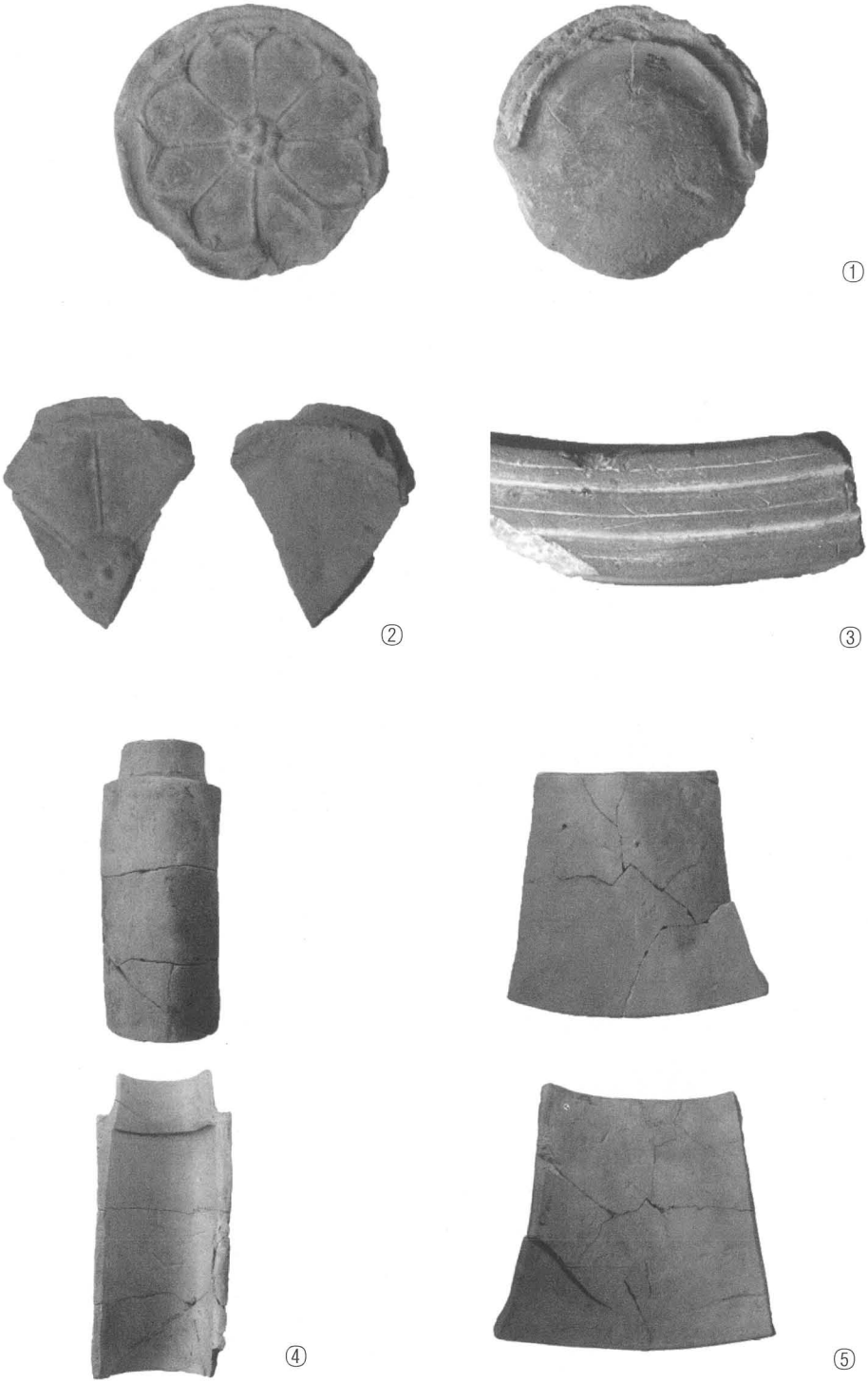


③

第３図　幡枝元稲荷瓦窯出土軒丸瓦



第４図　幡枝元稲荷瓦窯出土丸・平瓦



第５図　平野山瓦窯出土軒瓦および丸・平瓦

は凸面全面をナデ調整し大部分のタタキ痕が消されているが、無文叩き板や平行叩き板を使用したものが少数確認された。粘土素材はすべて粘土板で、凹面に粘土板の合わせ目と糸切り痕が観察される。

丸瓦はすべて玉縁式。模骨は円筒形で玉縁部までは及ばないものと、玉縁部を若干細く彫り出したものの２種類が確認できる。側面を二次調整するため、粘土円筒半截時の瓦刀を当てた方向は不明であるが、側面の一方は凹面側でもう一方が凸面側と考えられる資料がある。筒部凸面の上半はナデ調整、下半は未調整かケズリ調整である。

平瓦の平面形態は台形状である。模骨桶を使用し、側板の幅は3.8～7.2cmである。模骨連結痕はほとんどみられないが、模骨連結の可能性がある痕跡が少数確認できた。分割時の瓦刀を当てる方向は両側面ともに凹面側からであるが、破断面と側面凹面側をヘラケズリしている。側面には分割界点、あるいは紐による分割界線が観察される。凹面の調整については両端部付近に横方向のナデ調整や粘土板合わせ目のナデ消しが確認でき、模骨痕跡が大きく突出してしまった部分を縦方向に強くナデ消した資料もある。両端部はヘラケズリの後にナデを施している。

この窯址から出土した瓦は、共伴した須恵器と瓦当文様、平瓦製作技法をもとに７世紀初～中葉に編年されている。

4）栗栖野５・６号瓦窯[10]（第６図）

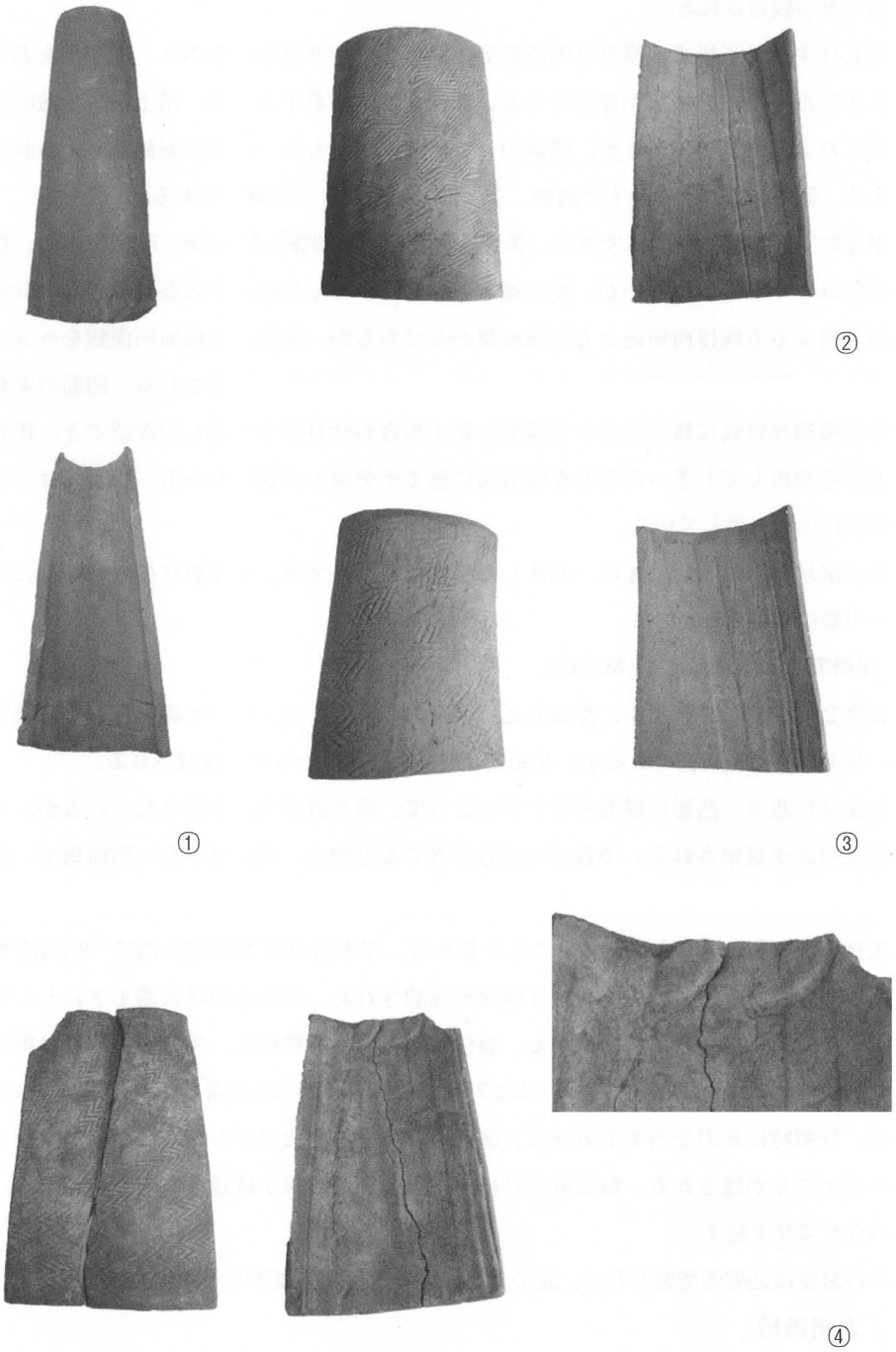
瓦窯２基が確認されたが、瓦は丸瓦、平瓦のみ出土した。すべて赤褐色を呈し硬質である。粘土素材は粘土板であるが、丸瓦では粘土紐を用いたものも確認される。

丸瓦は行基式。凸面は縦方向のナデによって、叩き痕が大部分消されているが、一部に鋸歯文叩きが観察される。半截時に瓦刀を当てる方向は、両側面ともに凹面側で、側面は３、４回にわたるヘラケズリが施される。平瓦の平面形態は台形状である。一部に玉縁を形象化したような特殊な形態のものも少量ある。叩き板の長さは短板で6.7～9.1cmを測る。凸面の叩き痕は鋸歯文状のものが３種類が確認された。叩き方向は広端を下にした場合に右下から左上へ向かう弧状を呈する。製作には模骨桶を使用し、模骨板の形態は細長の台形で、板の幅については、短いものは2.7cm、長いものは6.3cmを測る。模骨連結痕はみられない。分割時に瓦刀を当てる方向は、両側面いずれも凹面側からで、側面には数度にわたるヘラケズリが施される。側面近くには紐による分割界線が確認される資料がある。両端はヘラケズリを施す。

この窯址は瓦陶兼業窯として、瓦の年代は７世紀後半に編年されている。

２．九州地域

６世紀末から７世紀後半に編年される瓦を出土した遺跡は多く、その様相は、遺跡別に整理されて報告されている[11]。瓦陶兼業窯から主に出土するが、製作技法が相互に類似す



第６図　栗栖野５・６号瓦窯出土丸・平瓦

る。ここでは、各遺跡出土の瓦を６世紀末から７世紀前半[12]と７世紀後半に分け、その様相を検討する。

１）６世紀末～７世紀前半

該当する遺跡としては、福岡県太宰府市神ノ前２号窯跡、大野城市野添13号窯跡、同牛頸日ノ浦遺跡17号住居跡、同月ノ浦Ⅰ号窯跡、同小田浦窯跡群28地点、春日市惣利西遺跡２・４号住居跡、福岡市那珂遺跡などがある[13]。

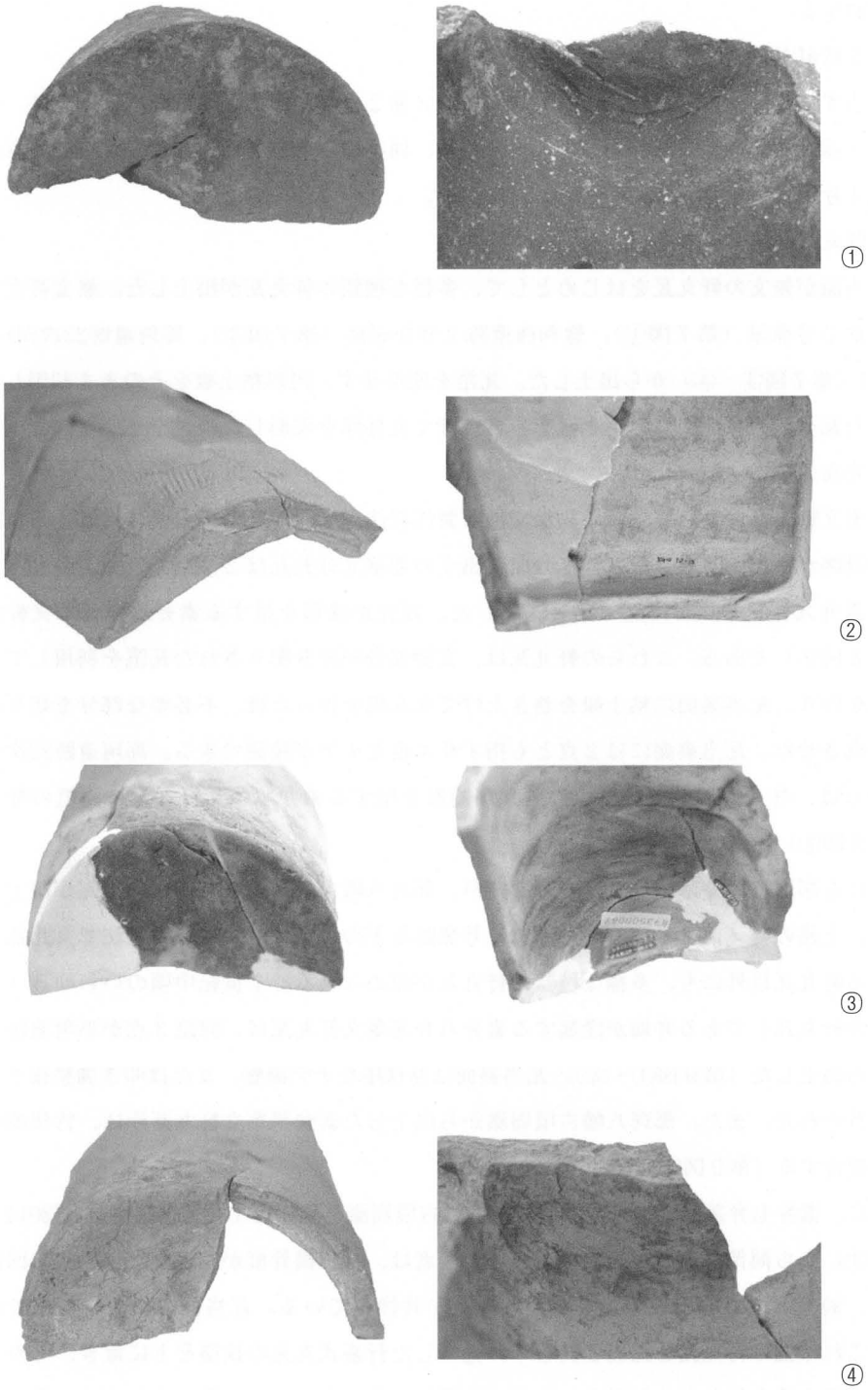
①　軒丸瓦（第７～10図）

瓦当面が無文の軒丸瓦をはじめとして、多様な種類の軒丸瓦が出土した。無文軒丸瓦は神ノ前２号窯址（第７図①）、惣利西遺跡２号住居跡（第７図②）、那珂遺跡23次SD44、SX04（第７図③・④）から出土した。瓦笵を使用せず、円形粘土板をそのまま利用して製作した瓦当部の裏面上に、粘土紐を巻き上げて丸瓦部を成形した後、不必要な部分を切り取り完成させている。

蓮華文軒丸瓦については、多様な文様と製作技法が確認されている。月ノ浦Ⅰ号窯跡、那珂遺跡から出土した。月ノ浦Ⅰ号窯跡出土の蓮華文軒丸瓦は２種類で、弁端が丸みを帯びる素弁九弁蓮華文軒丸瓦（第８図①）と、蓮弁が菱形を呈する素弁八弁蓮華文軒丸瓦（第８図②）である。これらの軒丸瓦は、文様部分が浮き彫りされた瓦笵を利用して瓦当文様を作り、瓦当裏面に粘土紐を巻き上げて丸瓦部を作った後、不必要な部分を切り取って完成させた。瓦当裏面には２点とも指オサエ痕とナデが確認できる。那珂遺跡22次包含層からは、月ノ浦Ⅰ号窯跡出土の蓮弁が菱形を呈する素弁蓮華文軒丸瓦と同笵の軒丸瓦（第８図③）が出土した。

他にも那珂遺跡では、竪穴住居跡、井戸、那珂八幡古墳周濠などから軒丸瓦が出土している。上述の神ノ前２号窯跡や月ノ浦Ⅰ号窯跡などのように、泥條盤築技法で丸瓦部を製作する軒丸瓦以外にも、多様な種類の軒丸瓦が認められる。７世紀中頃のいわゆる「百済系単弁軒丸瓦」である弁端が隆起する素弁八弁蓮華文軒丸瓦は、同笵３点が那珂遺跡井戸53から出土した（第９図①・②）。瓦当裏面は無秩序なナデ調整、または叩き調整後ナデ調整が行われた。また、那珂八幡古墳周濠から出土した素弁蓮華文軒丸瓦片は、竹状模骨丸瓦と接合する（第９図③）。

次に、素弁七弁蓮華文軒丸瓦は、那珂八幡古墳周濠（第10図①）と那珂遺跡SC3014（第10図②）から同笵のものが２点出土した。後者は、竹状模骨痕が瓦当部下半の突帯凹面に残り、両者ともに竹状摸骨痕を有する丸瓦が共伴している。瓦当面中央がへこんでいるが、これは他の軒丸瓦と瓦当と異なり、完成した行基式丸瓦の狭端を上に置き、その上から瓦当部を接合したためと考えられる。狭端部を上になるように置いたためか、切り取った丸瓦が下方へ行くほど広がる形態である。この素弁七弁蓮華文軒丸瓦を模倣して蓮華文



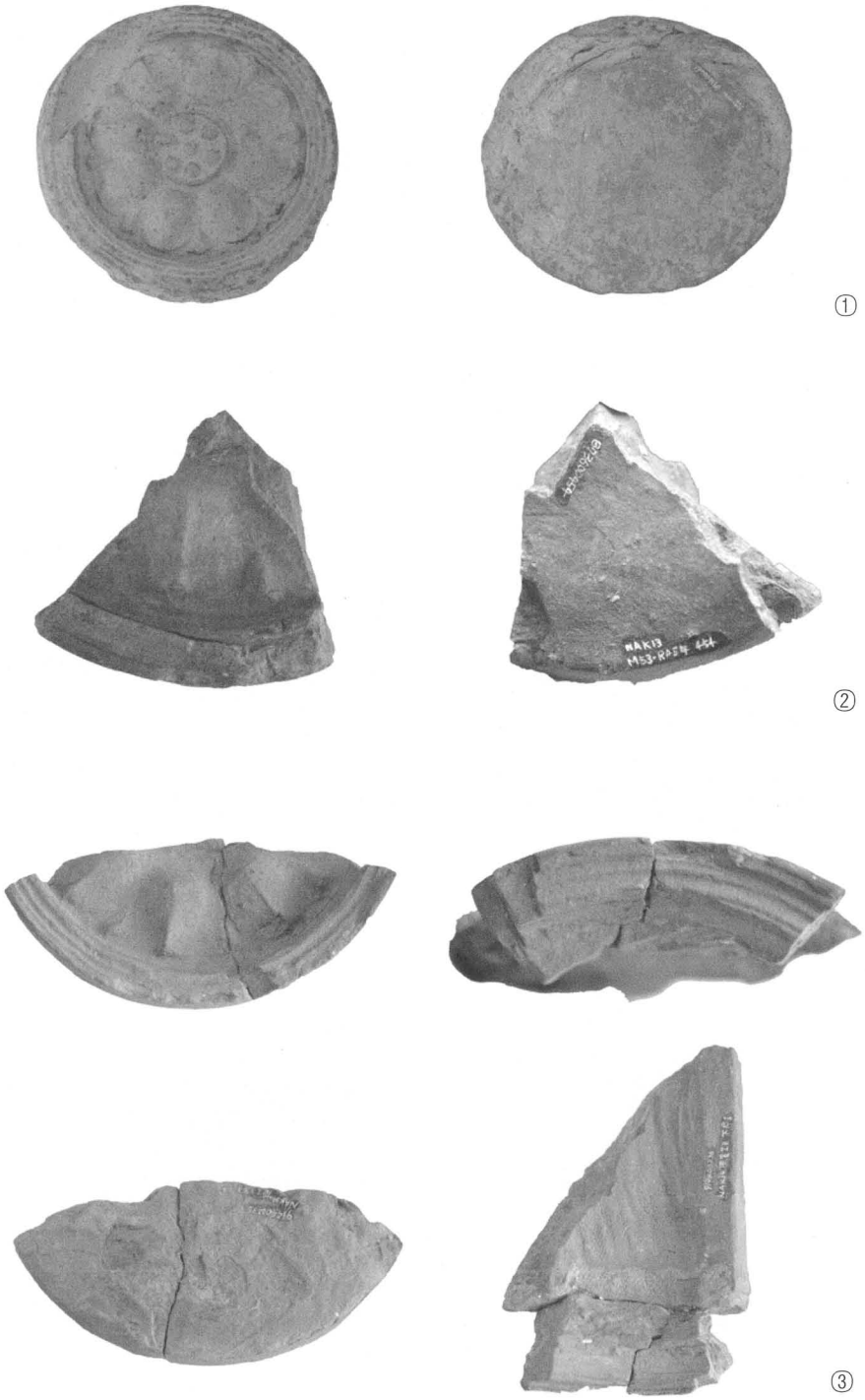
第７図　九州の無文軒丸瓦

①

②

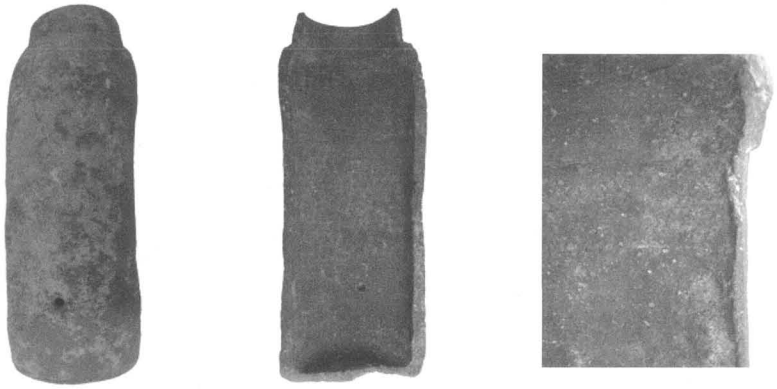
③

第８図　九州の蓮華文軒丸瓦１



第９図　九州の蓮華文軒丸瓦２

第１０図　九州の蓮華文軒丸瓦３

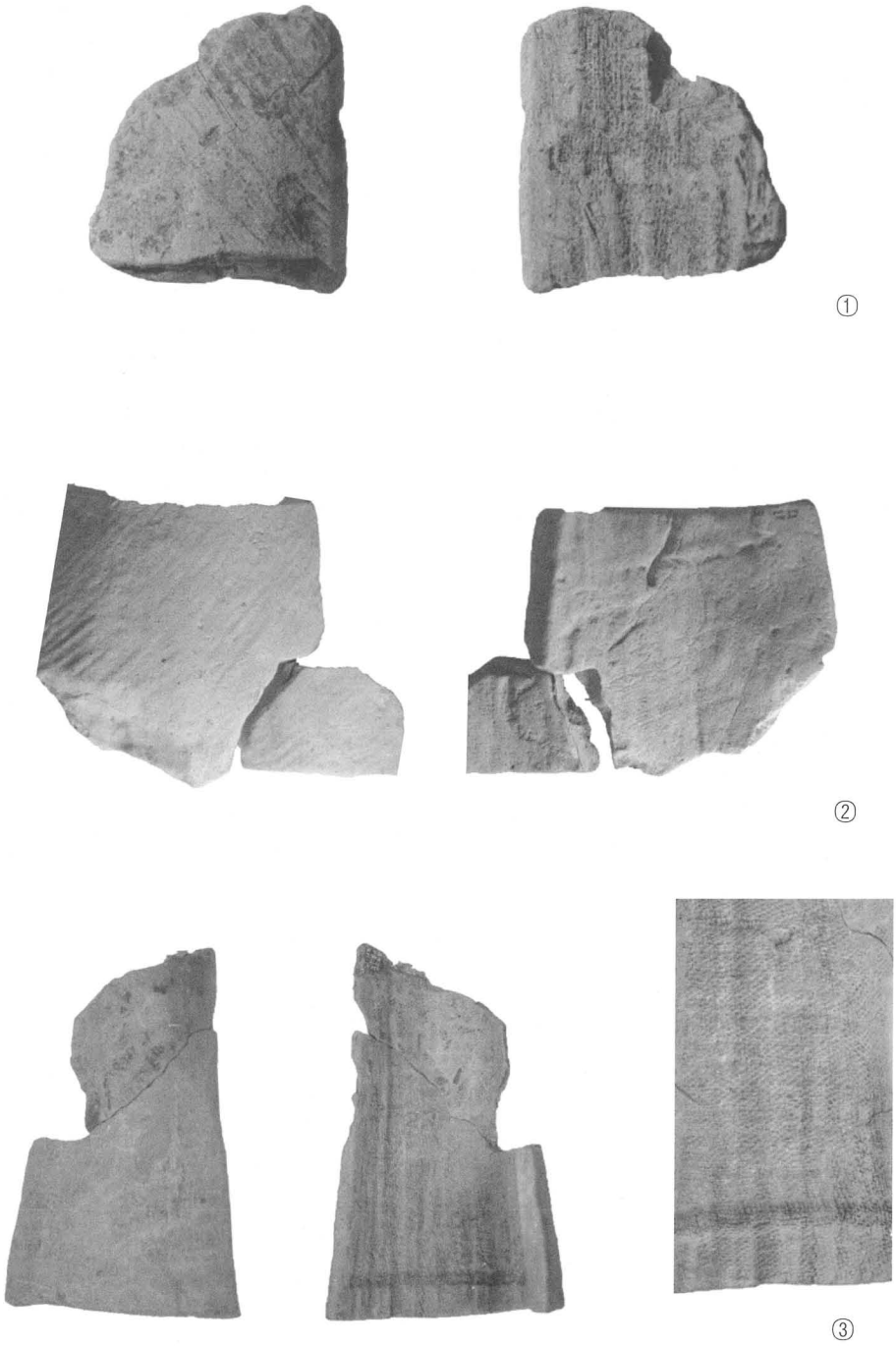


①

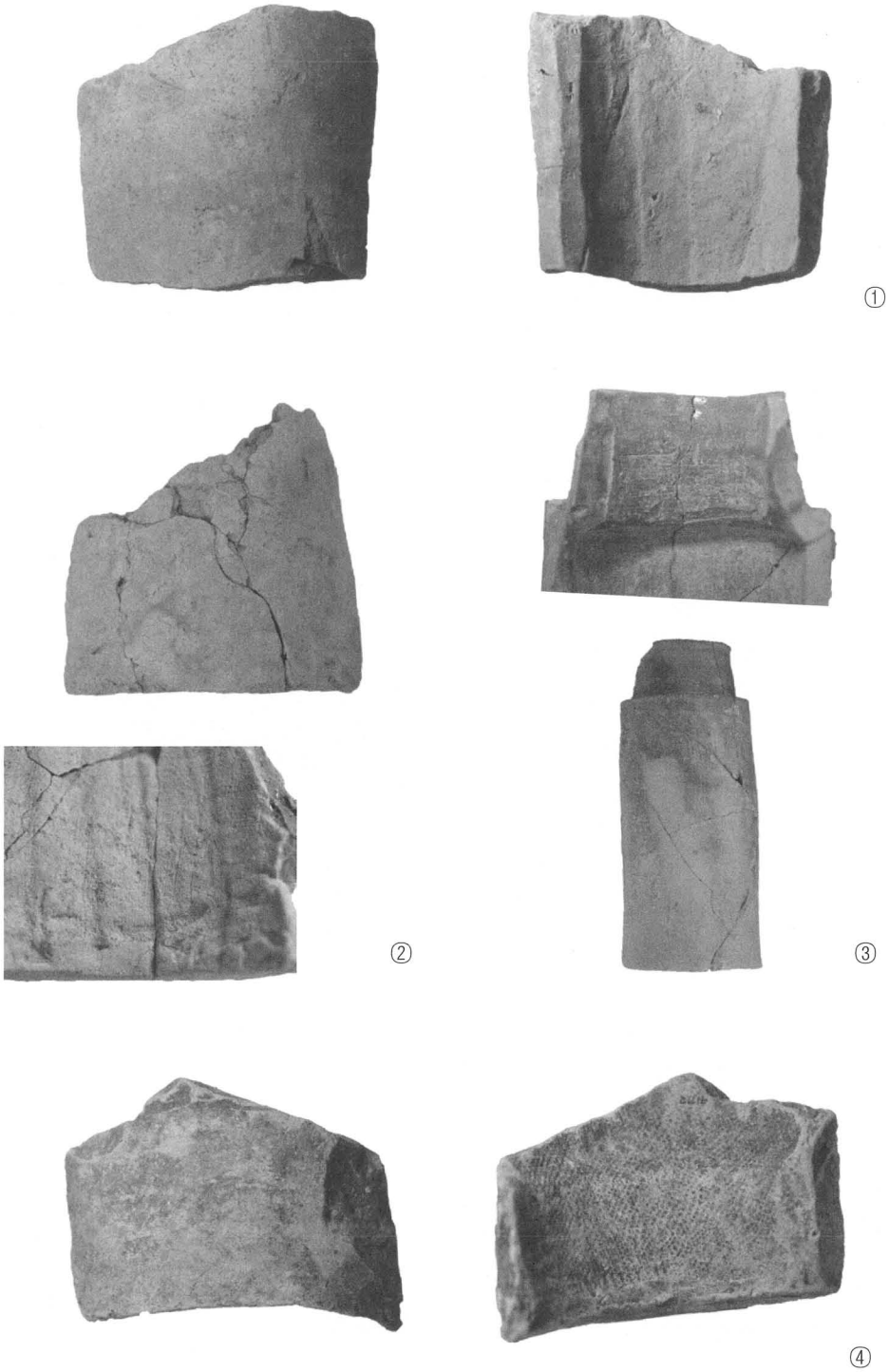
②

③

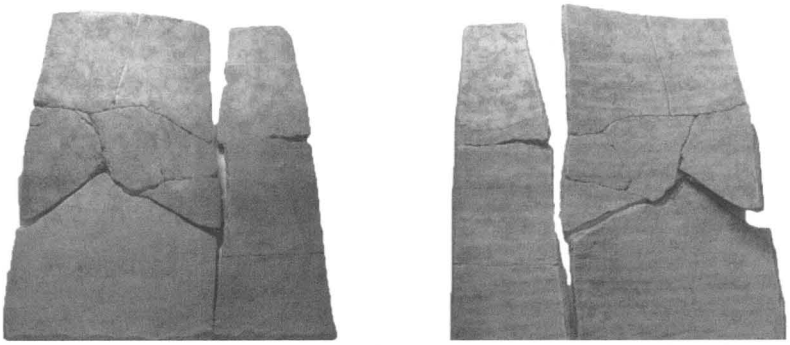
第11図　九州の丸瓦1（無瓦桶）



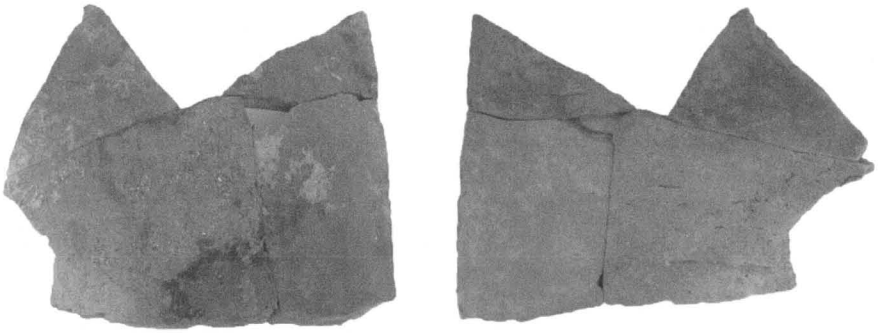
第12図　九州の丸瓦２（竹状模骨）



第13図　九州の丸瓦３（板状模骨、円筒形瓦桶）



①

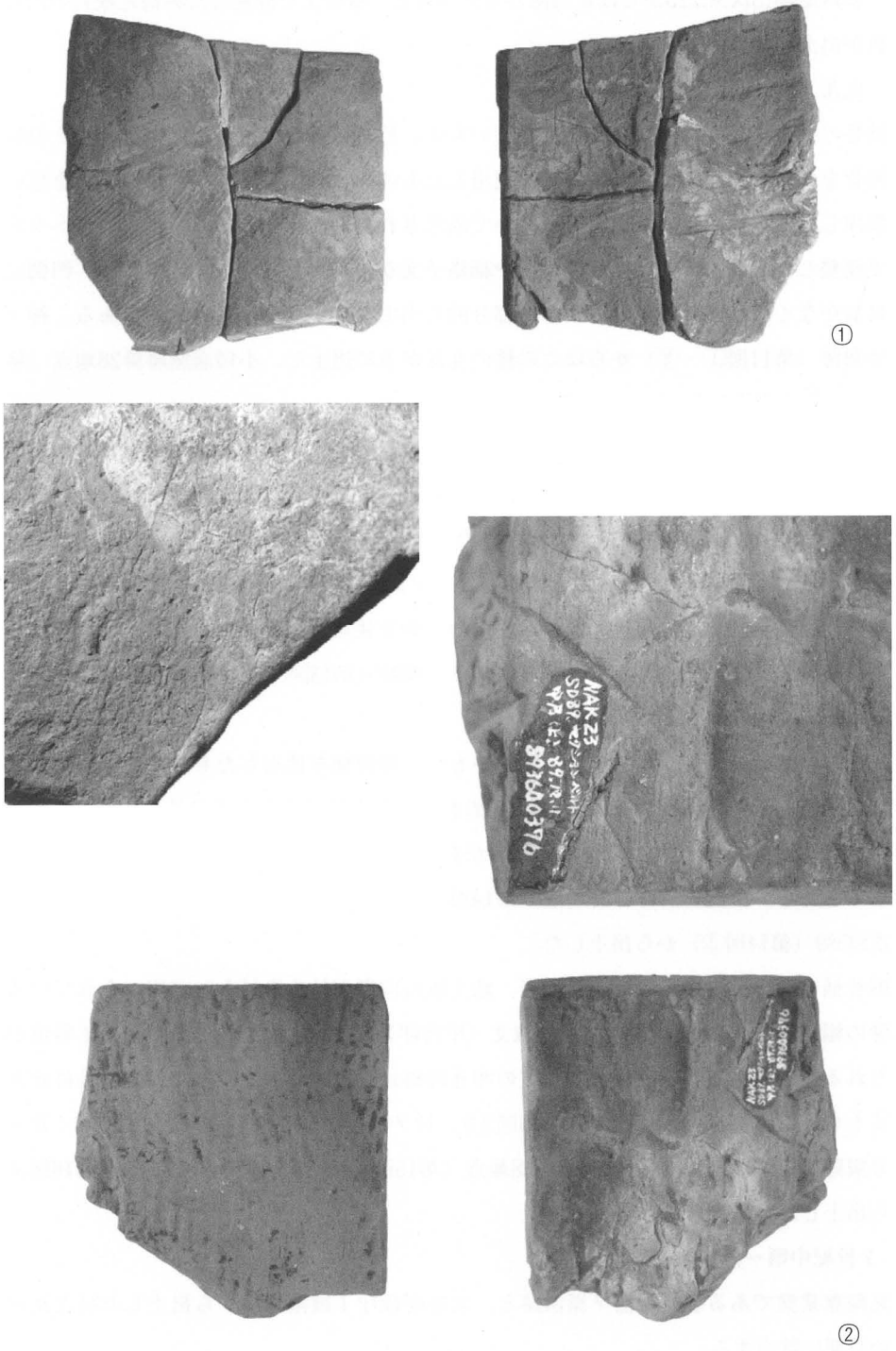


②

③

第14図　九州の平瓦１（無瓦桶）

第15図　九州の平瓦２（補足の叩き締め）



第16図　九州の平瓦３（補足の叩き締め）

を線刻し瓦当文様を作った資料も、那珂八幡古墳周濠から出土している（第10図③）。また、那珂遺跡13次SC215からは瓦当部と考えられる、樹枝文を線刻した赤褐色硬質の円形粘土板が出土した（第10図④）。

② 丸瓦（第11～13図）

模骨の種類によって、模骨を使用しないもの、竹状模骨を使用したもの、側板を連結した模骨を使用したもの、円筒形模骨を使用したものの４種類に区分される。模骨を用いずに製作した丸瓦は玉縁式で粘土紐を用いて成形された。凸面をみると、横方向にヘラ状工具で調整したもの、線文（平行叩き）や細格子文などが確認できるものがある。凹面には布目痕がなく、回転ナデ痕がみられ、部分的に当て具痕が確認されるものもある。神ノ前２号窯跡（第11図①・②）からはこの種の丸瓦が主に出土し、小田浦窯跡群28地点（第11図③）からも出土した。

竹状模骨桶を使用した丸瓦は、凸面に線文（平行叩き）や格子文が確認でき、凹面に竹状模骨連結痕が残っている。月ノ浦Ⅰ号窯跡（第12図①）、野添13号窯跡（第12図②）、那珂遺跡23次SD89（第12図③）から出土した。側板を連結した模骨を使用した丸瓦の文様は、線文（平行叩き）と格子文などである。月ノ浦Ⅰ号窯跡（第13図①）、惣利西遺跡４号住居跡（第13図②）から出土した。円筒形の模骨を使用した丸瓦は、玉縁式丸瓦である。惣利西遺跡２号住居址（第13図③）、月ノ浦Ⅰ号窯跡（第13図④）から出土した。

③ 平瓦（第14～16図）

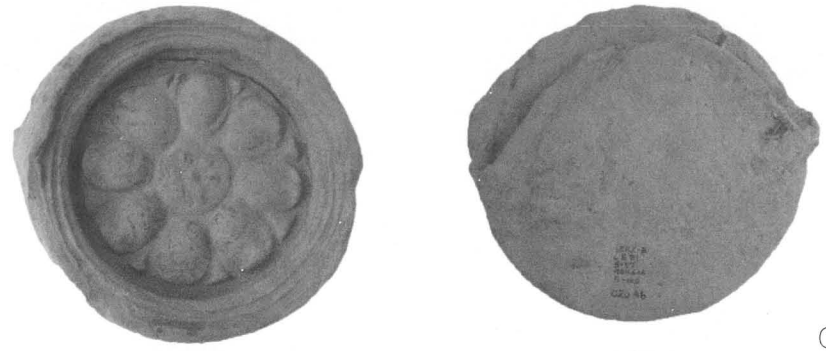
瓦桶の種類によって、瓦桶を使用しないもの、模骨桶を使用したものの２種類に区分される。瓦桶を用いずに製作した平瓦は、基本的に粘土紐で成形される[14]。文様は丸瓦と同様、無文、線文（平行叩き）、格子文などがある。土器の口縁部のように端部を丸く処理したものもある。小田浦窯跡群28地点（第14図①）、神ノ前２号窯跡（第14図②）、那珂遺跡23次SD89（第14図③）から出土した。

模骨桶を使用した平瓦には、粘土紐、粘土板の両者が粘土素材として用いられている。模骨の幅は1.5～3.4cmである。文様は線文（平行叩き）や格子文で、分割界線たる紐痕が観察される資料もある。内面には、補足の叩き締めによる同心円文や無文の当て具痕がみられるものもある。野添13号窯跡（第15図①）、日ノ浦遺跡17号住居跡（第15図②）、月ノ浦Ⅰ号窯跡（第15図③）、小田浦窯跡群28地点（第16図①）、那珂遺跡23次SD89（第16図②）から出土した。

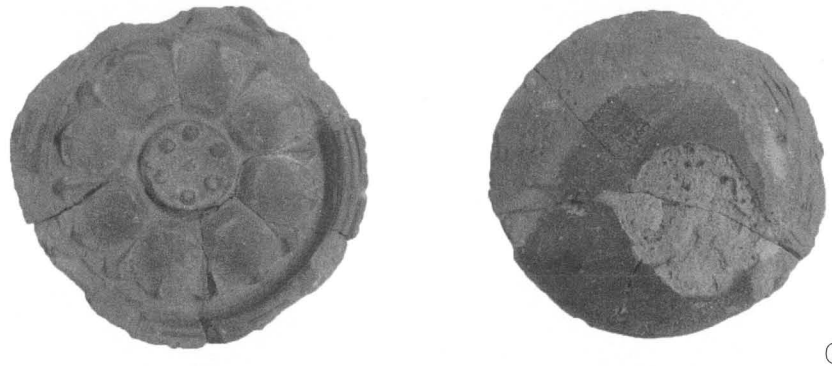
2） 7世紀中頃～後半

瓦陶兼業窯である春日市浦ノ原窯跡と、大宰府政庁Ⅰ段階建物から出土した軒丸瓦が、この時期に該当する。

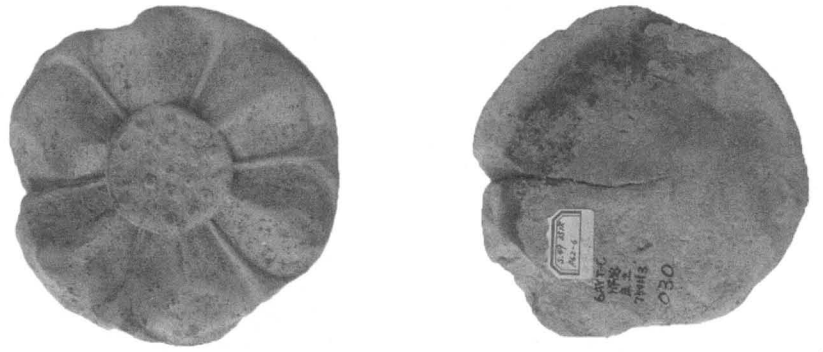
① 軒丸瓦（第17・18図）



①



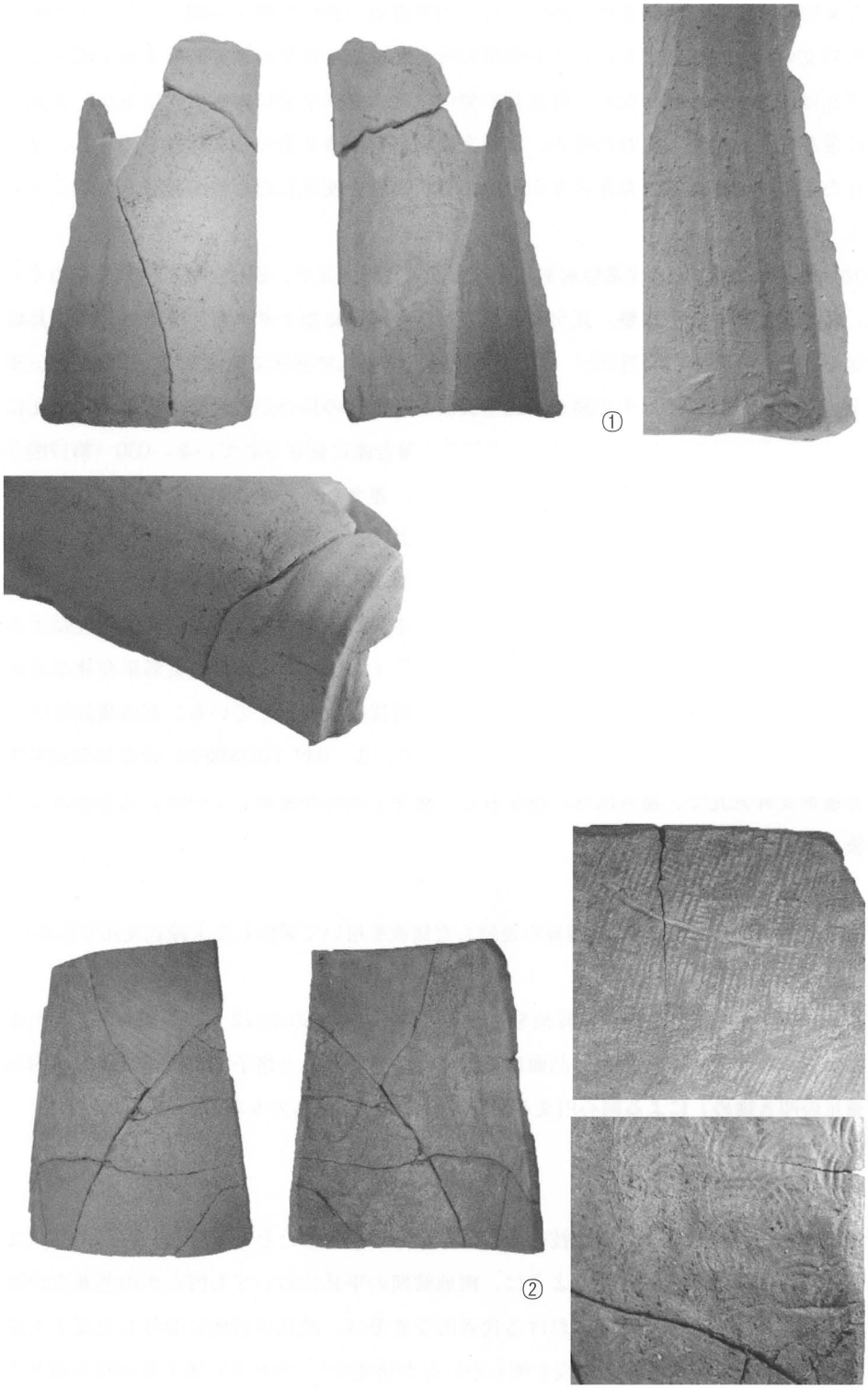
②



③

第 17 図　大宰府の軒丸瓦

第18図　大宰府の軒丸瓦および夢村土城・三成洞土城出土軒丸瓦



第19図　九州における７世紀後半の丸・平瓦

大宰府政庁Ⅰ段階建物をはじめとして、大宰府市一帯に位置する観世音寺、大野城などから同文の軒丸瓦が出土した。この時期の軒丸瓦は韓半島系の単弁蓮華文が主流をなし、軒平瓦は原則的に存在しない。軒丸瓦の製作技法は瓦当文様によって異なるが、丸瓦下端部に蓮華文瓦当を差し入れたもの、蓮華文周囲に粘土紐をまわして周縁をつくり、丸瓦を付けたものなどがある。丸瓦のなかには、竹状模骨を使用したものが確認されることもある[15]。

020A[16]（第17図①）は弁端隆起形単弁八弁蓮華文軒丸瓦で、周縁部は三重弧文をめぐらせる。瓦当裏面は、ナデ調整。瓦当裏面の丸瓦接合部には指オサエ痕、または棒状工具痕が確認できる。020Ba（第17図②）は、弁端隆起形単弁八弁蓮華文軒丸瓦で、周縁部は三重弧文をめぐらせた。裏面はナデ調整。瓦当裏面と丸瓦との接合が容易となるように丸瓦に施した、クシ状工具によるキザミが、瓦当部側の接合面に転写されている。030（第17図③）は単弁六弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁には稜を有し、蓮弁と間弁が連結している。瓦当裏面はナデ調整し、下側面はヘラケズリ痕が残る。丸瓦端部に蓮華文瓦当を差しこむ、いわゆる「嵌めこみ式」の接合技法と考えられる。033（第18図①）は弁端隆起形単弁八弁蓮華文軒丸瓦で、弁端は丸く三角形状に隆起する。蓮弁中央に稜を有し、蓮弁と間弁が連結する。瓦当裏面には指オサエ痕が残っている。020Bb[17]（第18図②）は弁端尖形単弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁間に珠点状を呈する間弁があり、中房周囲は突出している。瓦当裏面はナデ調整。瓦当裏面に加工していない丸瓦を差し込んでいる。032（第18図③）は弁端隆起形単弁八弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁内部に稜を有し、蓮弁と間弁が連結している。瓦当裏面はナデ調整。

② 丸瓦（第19図①）

浦ノ原窯跡から出土した[18]。側板を連結した側板を用いて製作した玉縁式丸瓦である。

③ 平瓦（第19図②）

浦ノ原窯跡から出土した。模骨桶を使用しており、側板の幅は2～2.9cmである。粘土素材は粘土紐、粘土板の２種類で、凸面には線文（平行叩き）と格子文が確認できる。内面に「補足の叩き締め」による同心円文と無文当て具痕が残るものもある。

Ⅳ．日韓瓦の関連性

日本の瓦が、韓半島の瓦製作技術の影響を受けて成立したとみる場合、軒瓦の瓦当文様や製作技法上での共通性と同じように、両地域間の平瓦においても何らかの共通点が観察されるはずである。先行研究における代表的な成果は、飛鳥寺創建に関与した瓦工人集団である「花組」と「星組」の源流を明らかにした研究で[19]、それぞれ韓半島の扶余龍井里寺址下層金堂址や旧衙里遺跡に比定されたことがある。このような成果は、軒丸瓦とともに

第１表　６～７世紀における三国時代の平瓦の特徴

		高句麗	百済	新羅
色調		赤褐色＞灰青色	灰青色	灰青色
叩き文様		縄文＞格子文＞鋸歯文	線文＞格子文、縄文	線文＞格子文
叩き方向		横方向	横方向、弧状	弧状
素地の形態		粘土紐	粘土板＞粘土紐	粘土板＞粘土紐
分割界線の種類		紐	紐、棒、釘（界点）	？
側面二次整面の有無		有	無＞有	無＞有
丸瓦の種類		行基式丸瓦	行基式丸瓦、玉縁式丸瓦	行基式丸瓦、玉縁式丸瓦
平瓦桶の種類		模骨桶	模骨桶＞円筒桶	円筒桶＞模骨桶、無瓦桶
模骨	側板平均幅	２～３cm	４～６cm	６～８cm
	連結痕の有無	無	有、無	無〉有

平瓦の叩き痕、側面調整、分割界点または分割界線の種類、軒平瓦の模骨連結法、そして丸瓦の種類などの属性比較を通して明らかとなった事実であり、主に平瓦の分析が基礎となっている。

前章で詳細に述べた６～７世紀に該当する日本の遺跡出土瓦を、以上の属性を参考としながら、平瓦の色調、瓦桶の種類、模骨側板の幅などを追加して整理すれば、第２表のとおりである。この表を、韓半島三国時代の平瓦の特徴を整理した第１表と比較してみよう。

その結果、韓半島と日本の平瓦の属性が完全に一致する遺跡はみられない。ただし、平野山瓦窯と栗栖野瓦窯出土平瓦は、百済や高句麗の平瓦とそれぞれ４つ以上の属性が一致している。まず、平野山瓦窯の場合、軒丸瓦の文様も百済的であるが、平瓦も素材が粘土板である点、模骨桶の使用、分割界点の存在、分割界線として紐を採用した点、模骨連結痕の可能性がある痕跡が確認される点など、百済泗沘期の平瓦と同一とみてとることができる。

栗栖野瓦窯では軒丸瓦は出土していないが、平瓦の色調が赤褐色である点、鋸歯文叩き、模骨幅が多少狭い模骨桶を用いる点、そして模骨連結痕が確認されない点など、高句麗の平瓦と類似する。

幡枝元稲荷瓦窯と隼上り瓦窯出土の平瓦は、高句麗、百済、新羅それぞれと共通する属性が１、２点ずつある。幡枝元稲荷瓦窯では粘土板を素材とし模骨桶を使用しており、隼上り瓦窯では粘土板が基本で粘土紐も少量確認でき、模骨桶を使用している。粘土紐を素材として用いない、あるいは少量である点は高句麗の平瓦とは異なる。一方で、平瓦の瓦桶が模骨桶であることは、高句麗、百済、新羅の平瓦とすべて共通する属性である。以上のような要素のために、幡枝元稲荷瓦窯と隼上り瓦窯は三国のうち、ある一定地域と関連があったとみるのは困難である。両遺跡では、ともに百済系と高句麗系軒丸瓦が共伴するという特徴がある。

第２表　６～７世紀における日本近畿地域と九州地域の瓦の特徴

		近畿地域			九州地域		
遺跡名		隼上り瓦窯	幡枝元稲荷瓦窯	平野山瓦窯	栗栖野瓦窯	神ノ前２号窯跡など	大宰府政庁Ⅰ段階建物など
時　期		７世紀前半	７世紀前半	７世紀初～中葉	７世紀後半	６世紀末～７世紀前半	７世紀後半
軒丸瓦文様		蓮華文	蓮華文	蓮華文		無文、蓮華文、樹枝文	蓮華文
軒丸瓦の系統		高句麗系＞百済系	百済系＞高句麗系	百済系	×	？	？
色　調		灰青色＞赤褐色	灰青色、赤褐色など	灰青色＞赤褐色	赤褐色	赤褐色多い？	
叩き文様		格子文	格子文＞線文（平行叩）	無文[20]、線文	鋸歯文	線文、格子文	線文、格子文
素地の形態		粘土板＞粘土紐	粘土板	粘土板	粘土板〉粘土紐	粘土紐、粘土板	粘土紐、粘土板
分割界線の種類		紐	棒	紐、分割界点	紐	紐	
側面二次整面の有無		有	有、無	有＞無	有		
丸瓦の種類		行基式丸瓦	行基式丸瓦	玉縁式丸瓦	行基式丸瓦	行基式丸瓦、玉縁式丸瓦	
平瓦桶の種類		模骨桶	模骨桶	模骨桶	模骨桶	無瓦桶、模骨桶	模骨桶
模骨	側板1枚の平均幅	3.2cm	4.3～4.9cm	3.8～7.2cm？	3.3cm	1.5～3.4cm	2～2.9cm
	連結痕の有無	無	無	無＞有？	無	無	
丸瓦模骨の種類						無瓦桶、竹状模骨、板状模骨、円柱形模骨	竹状模骨
補足の叩き締めの有無			有（下端部）		無	有	無

九州地域においてこの時期の瓦が出土する遺跡としては、神ノ前２号窯跡、野添13号窯跡、日ノ浦遺跡17号住居跡、月ノ浦Ⅰ号窯跡、小田浦窯跡群28地点、惣利西遺跡２・４号住居跡、那珂遺跡、浦ノ原窯跡、大宰府政庁Ⅰ段階建物などがある。軒丸瓦の瓦当文様は、無文や蓮華文である。丸瓦や平瓦の製作においては、模骨や瓦桶を用いないものと模骨や模骨桶を用いるものがある。また、粘土素材には粘土板と粘土紐の両者が確認できる。これらの遺跡のうち、那珂遺跡、大宰府政庁Ⅰ段階建物から出土した、いわゆる「百済系単弁軒丸瓦」と呼ばれる蓮華文軒丸瓦は、早くに韓半島との関連性が指摘されたが、他の遺跡の蓮華文、無文軒丸瓦は韓半島に源流を探すのは困難である。

蓮弁が、菱形あるいは滴水形に陰刻された月ノ浦Ⅰ号窯跡出土の軒丸瓦は、韓半島から同文の資料を見出すことはできない。この軒丸瓦丸瓦部を泥條盤築技法で成形した後に、不必要な丸瓦部分を切り取って完成させたものである。月ノ浦Ⅰ号窯跡出土品の類例をあえて韓半島で探そうとすれば、時期的な差異はあるが、ソウル夢村土城（第18図④）や同三成洞土城出土の蓮華文軒丸瓦（第18図⑤）を挙げることができる。このうち後者は、隼上り瓦窯出土の高句麗系軒丸瓦の源流として比定されている遺物で、隼上り瓦窯が７世紀前半であるという点から、「高句麗新羅系瓦」と呼ばれている[21]。

瓦笵を用いず、粘土板をそのまま瓦当面として利用した九州地域の無文軒丸瓦もまた、無文の瓦当へあらかじめ半截した丸瓦を差し入れる技法の扶余地域の瓦とは異なる。九州の最も早い時期の瓦生産地である神ノ前２号瓦窯跡では、瓦笵を使用しない無文軒丸瓦と、模骨を用いずに粘土紐で成形した玉縁式丸瓦、瓦桶を用いずに粘土紐や粘土板で成形した平瓦が共伴している。よって、神ノ前２号窯跡の瓦製作技法は、百済を含めた韓半島、日本畿内地域のそれとは異なり、瓦工ではない在地土器工人によって生産されたと推定される。ただし、この遺跡の瓦編年は須恵器の年代観をもとに決定（６世紀末～７世紀初以前）されているため、今後、比較できる資料が増加すれば瓦年代が修正される可能性があり、それによって瓦の源流もまた変わりうる。瓦の製作時期が飛鳥寺創建期または創建期よりも遡及するならばその源流は韓半島に、飛鳥寺創建期よりも遅いのであれば韓半島と日本畿内地域のうちのどちらか、と考えられている[22]。

那珂遺跡から出土した樹枝文を線刻した粘土板は、漢城百済のものと文様面でのみ若干の類似性がみられる。また、蓮弁が三角形を呈する蓮華文軒丸瓦は、同一の文様、製作技法のものを韓半島でみつけることができない。この瓦は瓦当面が内側にへこみ、他の瓦当製作技法とは異なり、分割する前の竹状模骨丸瓦を、狭端が上に向くように置き、瓦当粘土を上から接合した後、不必要な丸瓦部分は切り取るという方式をとっている。

一方で、九州地域では、泥状盤築によって製作された丸・平瓦以外にも、模骨桶を用いて粘土板を粘土素材として製作された丸・平瓦が存在し、これらの資料の中には当て具痕跡が確認されるものもある。それも近畿の幡枝元稲荷瓦窯の瓦のように、端部付近のみを叩き調整するのではなく、ほぼ全面にわたって補足の叩き締めがなされている。前者の技法は、河東故蘇城や光陽馬老山城などで確認される技法と類似し、後者は堂捕城、無等里１堡塁、阿未城など、高句麗山城でみられる内面縄文叩き技法とも多少類似する。

九州地域における初期瓦の様相がこのように多様なのは、畿内地域とは異なり、大規模な仏教寺院建立を目的としていなかったためと考えられる。九州では既往の須恵器生産窯内で瓦生産を開始したため、当初は須恵器とともに少量の瓦を生産するシステムの下で須恵器の製作技法にならったが、徐々に本格的な瓦製作技法が適用される。これに対して畿内では、瓦が百済地域と共通性を有しながら須恵器窯とは完全に異なる構造、別途の場所で飛鳥寺の屋根全体を覆う目的のもとに大規模な生産が行われた[23]。

本稿で検討した日本の６～７世紀の平瓦には、円筒桶を使用した瓦がない。そのため、一見すれば新羅との関連性は全くないようである。しかしながら、九州地域の平瓦の凸面には線文（平行叩き）や格子文が多くみられ、粘土紐、粘土板の両者が粘土素材として確認されている。また、模骨や瓦桶を用いて製作された丸・平瓦も存在する。その多様性においては、むしろ同時期の新羅平瓦の様相と最も類似しているとみることもできる。

以上、韓半島と日本の平瓦を中心に諸属性を比較して、日本の遺跡から出土する平瓦が韓半島のどの地域と関連性がみられるかを検討した。検討を通して、平野山瓦窯は百済、栗栖野瓦窯は高句麗、神ノ前２号窯跡をはじめとした７世紀前半の遺跡から出土した瓦は、新羅と関連があるものと考えた。

しかし、平瓦のどの属性を、瓦技術の直接的な導入と関連付けることができるのかについては、依然として困難な問題として残る。瓦当文様ほどに確実な属性を見出し得ないという悩みに陥ることもあるが、かといって韓半島と日本の瓦当文様が完全に同一なわけでもない。韓半島の影響を受けた日本の平瓦製作技法は、韓半島と完全に同一ではない可能性が大きく、瓦当文様と同様に、多少変形した姿として現れた場合なども考える必要があろう。一方では、日韓各地域において瓦製作技術が最初に導入される際には、泥條盤築技法で製作した瓦が確認されるなど、共通性が強く現れもする。泥條盤築技法は日本の初期瓦のみならず、漢城百済の瓦、新羅の初期瓦でも認められるものであり、瓦製作に土器工人が関与したことに起因すると考えられる。

Ⅴ．結　語

韓半島の瓦工人の渡来により、日本の飛鳥時代において初期の瓦が製作され、九州地域や関東地域に影響を及ぼす際には、このような瓦製作技術が多少変容したとしても、そこには明らかに韓半島の技術が反映されているであろう。このような前提のもとで本稿では、瓦博士の伝来時期である588年を基準とし、瓦製作技術が、日本在地土器工人たちの技術と結合するなどして完全に土着化する以前の６～７世紀の日本の瓦を対象として、高句麗、百済、新羅の平瓦技術との関連性の把握を試みた。しかしながら、古代の日韓における瓦の関連性を平瓦を中心に検討し、既往の軒瓦研究の不足部分を埋めるには、多くの限界と問題が浮き彫りになった。韓半島と日本の初期瓦に対する筆者の理解不足もあり、ここでは韓国国内ですでに断片的に紹介されてきた日本の初期の軒丸瓦と平瓦を総体的に紹介することに重点を置いた。

現段階で、平瓦を通して韓半島と日本の間の瓦製作技術の関連性を扱うには、未だ多くの限界がある。これを解決するためには、まず両国間の瓦の類似した現象が、工人の移動に起因するのか、瓦製作道具の移動に起因するのか、それとも造瓦技術や瓦製作道具を模倣したことに起因するのかなどに対する真摯な検討が必要である。そして、このような前提が成立したならば、そこでは瓦のどの属性が問題を解決するのに有効となりうるのかに対する検討が要求される。

同時に、これまで遺跡別に平瓦を分析する際の有効な属性として考えてきた瓦桶の構造、分割界線の種類や分割方法などの属性を詳細に観察しながら、これらをさらに綿密に

検討しなければならないであろう。遺跡ごとの研究成果が蓄積され、地域別の瓦の特徴が明らかとなり、さらには高句麗と百済、新羅の瓦の特徴が明確になるであろう。また、高句麗、百済の影響下に成立したと認識されている、新羅瓦に対する具体的なアプローチも試みることができるであろう。このような過程を通して、今後日韓間の瓦製作技術の影響関係を客観的に検討できるようになることを期待する。

註

1　清水昭博「기와의 전래 －백재와 일본의 초기 기와생산체제의 비교－」『百済研究』第41輯、忠南大学校百済研究所、2005年。

2　심광주「고구려・백제 평기와의 제작기법 비교 백제의 생산과 기술」백제학회 2009년 춘계학술대회、2009年。
白種伍「高句麗　기와 研究」檀国大学校大学院博士学位論文、2005年。
崔孟植「高句麗기와의 特性」『고구려발해연구』고구려발해학회、2001年。

3　井内古文化研究室編『朝鮮瓦塼図譜Ⅱ　高句麗』1976年。

4　崔孟植『百済 평기와 製作技法 新研究』학연문화사、1999年。

5　金基民「新羅 기와 製作法에 관한 研究－慶州 勿川里 出土 기와를 중심으로－」東亜大学校大学院硕士学位論文、2001年。
趙成允「慶州 出土 新羅 평기와의 編年 試案」慶州大学校大学院硕士学位論文、2000年。
崔孟植「高句麗기와의 特性」『고구려발해연구』고구려발해학회、2001年。

6　宇治市教育委員会『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』1983年。宇治市教育委員会『史跡 隼上り瓦窯跡』1989年。

7　京都大学考古学研究会『岩倉古窯跡群』1992年、pp.144－147。佐原真「幡枝窯跡の瓦」『史林』第90巻第３号、史学研究会、2007年。

8　瓦を桶から取り外した後に、瓦の一部分または全面にわたり叩き調整を行うもので、日本では「補足の叩き締め」としている。

9　八幡市教育委員会『平野山瓦窯跡発掘調査概報』1985年。八幡市教育委員会『楠葉平野山窯跡（第２次）発掘調査概報』1992年。

10　京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報　昭和60年度』1986年。京都大学考古学研究会『岩倉古窯跡群』（前掲註７）、pp.162－164。

11　比嘉えりか「初期瓦研究の現状と課題－筑前地域を中心に－」『七隈史学』第９号、2008年。
大野城市教育委員会『牛頸月ノ浦窯跡群』1993年、pp.32－41。

12　共伴した須恵器によって瓦の年代を決定しているが、報告書にはおおかた須恵器０期というように表記されている。『牛頸月ノ浦窯跡群』報告書によれば、神ノ前２号窯址はⅢＡ～ⅣＡ期として600年を遡及し、大浦２号窯址はⅣＢ～Ⅴ期で６世紀末から７世紀前半とする。したがって、須恵器ⅢＡ～Ⅴ期までを６世紀末～７世紀前半と比定することができる（大野城市教育委員会『牛頸月ノ浦窯跡群』（前掲註11））。

13　以下に述べる瓦の様相は、直接観察した資料に限定し、８世紀以後の瓦も出土した遺跡の場合は、６世紀末から７世紀前半に該当する資料のみ扱った。各資料の関連報告書は以下のとおりである。
神ノ前２号窯跡：大宰府町教育委員会『神ノ前窯跡』1979年。野添13号窯跡：大野城市教育委員会『野添窯跡群』1987年。日ノ浦遺跡17号住居跡：大野城市教育委員会『牛頸日ノ浦遺跡群』1994

年。月ノ浦Ⅰ号窯跡：大野城市教育委員会『牛頸月ノ浦窯跡群』1993年。小田浦28地点：大野城市教育委員会『牛頸月ノ浦窯跡群』1993年。惣利西遺跡：春日市教育委員会『春日地区遺跡群Ⅲ』1985年。那珂遺跡13次：福岡市教育委員会『那珂２』1990年。那珂遺跡22次：福岡市教育委員会『那珂遺跡３』1991年。那珂遺跡23次：福岡市教育委員会『那珂遺跡４』1992年。那珂遺跡32・34次：福岡市教育委員会『那珂10』1994年。

14 神ノ前２号窯跡の粘土板作りの平瓦の場合、内面を強くナデ調整しており、布目痕や模骨(側板)の痕跡が確認できない。瓦桶使用の有無を判断するのは困難である。

15 九州歴史資料館『大宰府復元』1998年、pp.58－59。

16 以下では、九州歴史資料館から発行された『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』の瓦番号にしたがうこととする（九州歴史資料館『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』2000年）。

17 九州歴史資料館『大宰府復元』（前掲註15）の図面には提示されていない資料であるが、九州歴史資料館所蔵の他の資料とは特徴が相違する資料としてこの段階に編年し、ともに提示した。

18 春日市教育委員会『浦ノ原窯跡群』1981年。

19 李다운「百済瓦博士考」『湖南考古学報』第20集、湖南考古学会、2004年。

20 ナデ調整によって叩き文様が消えた無文は除外し、叩き板自体に文様が刻まれていないものを意味する。

21 亀田修一『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館、2006年、p.478。

22 李다운「百済瓦博士考」（前掲註18）。

23 比嘉えりか「初期瓦研究の現状と課題－筑前地域を中心に－」（前掲註11）。

参考文献

百済文化開発研究院『百済瓦塼図録』1983年。
国立慶州博物館『新羅瓦塼』2000年。

本稿に掲載した写真図版は、筆者が本共同研究において日本国内で行った実地調査の際に、各関係機関のご高配により撮影させていただいたものである。記して感謝の意を表します。各資料の所蔵・保管は以下のとおりである。

隼上り瓦窯：宇治市教育委員会、幡枝元稲荷瓦窯：京都大学考古学研究室、平野山瓦窯：八幡市教育委員会、栗栖野瓦窯：(財)京都市埋蔵文化財研究所、神ノ前２号窯跡：太宰府市教育委員会、野添13号窯跡・牛頸日ノ浦遺跡17号住居跡・月ノ浦Ⅰ号窯跡・小田浦28地点：大野城市教育委員会、惣利西遺跡・浦ノ原窯跡：春日市教育委員会、那珂遺跡：福岡市埋蔵文化財センター、大宰府史跡：九州歴史資料館

한일 6~7세기 기와의 관련성 검토
-평기와를 중심으로-

이 인 숙

요 지 백제 와박사에 의해 성립된 일본의 飛鳥시대 초기 기와 기술은 이후 九州 지역이나 關東 지역에 영향을 미쳤다. 따라서 九州나 關東지역의 기와가 飛鳥시대 기와와는 다소 차이가 있다는 것은 당연하다. 그렇지만 거기에는 분명 한반도 조와 기술이 반영되어 있을 것이다. 이러한 전제 하에 본고는 와박사의 도래 시기인 553년을 기준으로 일본에서 조와 기술이 완전히 토착화되기 이전 단계인 6~7세기 近畿 지역과 九州 지역의 와요지 출토 기와에 반영되어 있는 고구려, 백제, 신라 평기와 제작 기법을 파악하고자 하였다. 그 결과, 한반도와 일본 평기와의 속성이 완전히 일치하는 유적은 보이지 않는다. 그러나 近畿의 平野山 瓦窯, 栗栖野 瓦窯는 백제, 고구려와 색조, 소지, 와통, 분할계선의 종류 등 4가지 이상의 속성이 일치하고 있어서 각각 백제, 고구려 평기와 기술과의 관련성이 보인다. 또 九州의 神ノ前2호 요지를 비롯한 7세기 전반의 유적 출토 기와들은 선문, 격자문이 많이 보이고 점토띠, 점토판형 소지가 모두 확인되면서 무와통, 모골와통으로 제작한 것 또한 관찰되고 있어서 동시기 신라 평기와 양상과 가장 유사하다. 반면에 幡枝元稻荷 瓦窯와 隼上り 瓦窯 출토 평기와는 고구려나 백제, 신라와 동일한 속성이 모두 한 두 가지 존재하므로 어느 국가와도 연관시키기 곤란하다. 본고는 고대 한일 기와의 관련성을 평기와를 중심으로 살펴보았으나 많은 한계와 문제가 드러났다. 여기에는 무엇보다 한반도와 일본의 초기 기와에 대한 필자의 이해 부족이 가장 큰 문제로 작용하였고 국내 연구와 보고 자료의 미흡도 한 몫을 하였다. 이에 이 글은 기왕에 국내에 단편적으로 소개되어 온 일본 초기 막새와 평기와를 일괄 유물로서 소개하는 데 의의를 두고자 한다. 역시 지금까지의 연구로는 평기와를 통해서 한반도와 일본 간 기와 기술의 영향 관계를 검토하는 데는 많은 한계가 있다. 이를 해결하기 위해서는 고구려, 백제, 신라 기와를 유적별, 지역별로 면밀히 검토해 볼 필요가 있다. 이에 앞서 기와 기술의 영향 관계를 파악하는 데 유효한 속성이 어떤 것인가에 대한 진지한 고민이 요구된다.

주제어 : 한반도 일본 막새 평기와 관련성

A study on relations of roof tiles between Korean peninsular and Japanese archipelago in the 6th~7th century

Yi In-suk

Abstract: The making techniques of roof tiles in early time of Aska period in japan established by craftsmen who was sent from Baekje had influenced Kyushu or Kanto region. There seems to had been somewhat minor alterations in making technique of roof tiles by this time. It seems like that the making techniques of roof tiles originated from Korean peninsular should be related to that of Japanese. Based on this perception, this paper intends to reveal the making roof tiles techniques of Kinki and Kyushu region in the 6th~7th century that had not been naturalized yet. There is no ancient site in japan which completely matches between Korean peninsular and Japanese in attributes of making plain roof tiles. But some ancient roof tile kiln sites of Kinki region show a little common attributes such like clay, mold, mark lines by stick orstring which divide roofing tile. So, it might be mentioned that making plain roof tile techniques that were related to those region Baekje, Gogurye. However, some other attributes in plain roof tile like clay coil, clay slab, or non-mold, assembly mold that shows influences of Silla. There have been no obvious persuasive assumption in consequence. Thus, there should be constants work examining data of each region to solve those problems and also should be serious discussion that which attributes imply relation of making techniques.

Keywords: Korean peninsular, Japanese archipelago, convex tile, plain tile, making techniques of roof tile, influence